

児童養護施設に看護師と福祉職と一緒に勤務する利点

○木村智一¹⁾, 塩飽 仁²⁾, 鈴木祐子²⁾, 相墨生恵³⁾, 井上由紀子²⁾⁴⁾, 名古屋祐子⁵⁾, 横山千恵²⁾⁵⁾, 鈴木千鶴²⁾⁵⁾
 1) 駒木野病院 2) 東北大学大学院医学系研究科 3) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科
 4) 東北大学病院 5) 宮城県立こども病院

【はじめに】近年、児童養護施設は被虐待、発達障害や慢性疾患といった様々な問題を抱えている子どもを受け入れており、厚生労働省や全国児童養護施設協議会は、そのような子ども達への専門的対応のために看護師を配置する必要があると提言している。しかし、近年の状況をふまえた児童養護施設に勤務する看護師の役割や必要性に関する研究は皆無であるといえる。

【目的】本研究は、児童養護施設で子ども達に継続的に関わる職員と管理者である施設長にとって、児童養護施設に看護師と福祉職と一緒に勤務する利点を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】自記式質問紙調査を実施した。

【対象】2013年4月時点で、日本国内の589か所の児童養護施設のうち看護師が配置されている施設(実数不明)において、子ども達に継続的に関わる職員(以後、福祉職とする)である基幹的職員と直接処遇職員各1名と、管理者である施設長1名の1施設あたり計3名とした。

【質問内容】「児童養護施設で看護師と福祉職と一緒に働くいいところ」について自由記述で回答を求めた。

【分析方法】自由記述を、Berelsonの内容分析に準拠して分析した。小児看護経験者8名による合議でカテゴリ、サブカテゴリの信用性を確保した。

【倫理的配慮】本研究は、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認を得て実施した。文書にて、施設長に許可を得た後、対象者に調査目的、方法、調査への協力の自由意思、協力しない場合でも不利益は生じないことを説明した。その上で、調査協力に同意する場合は、無記名の質問紙への回答を求め、その質問紙の提出をもって、調査協力への同意とみなした。

直接処遇職員63名であった。平均年齢は、施設長58.3±8.2歳、基幹的職員45.4±10.2歳、直接処遇職員35.1±9.5歳であった。内容分析の結果、240コード、20サブカテゴリ、5カテゴリが生成され、各カテゴリは、[子どもへの対応を充実させることにつながる][お互いに専門性をいかして仕事できるようになる][看護師の専門的知識をふまえて福祉職が子どもに対応できるようになる][負担や不安の軽減から福祉職の安心につながる][日常生活をふまえた看護師の対応につながる]と命名した。

【考察】児童養護施設に看護師と福祉職と一緒に勤務する利点として3点考えられた。1点目は今まで医療に関する専門的知識が不十分なまま様々な問題を抱える子ども達に対応せざるを得なかった福祉職が、看護師の知識を得て、自信を持って子どもへの対応ができること、2点目は看護師が勤務することで福祉職は子ども達への対応に関する負担や不安を軽減できること、3点目は専門的知識のある看護師が福祉職から子ども達の日常生活の情報を得ながら対応できることであった。

本研究は平成25年度北日本看護学会研究奨励会による研究奨励金により行われた。

カテゴリ	サブカテゴリ
子どもへの対応を充実させることにつながる	それぞれの専門性をいかした子どもの対応につながる 看護師の専門性をふまえた子どもの対応につながる 子どもの傷病対応が充実する 子どもの健康管理や疾病予防に関する対応が充実する 幅広く子どもへ対応することにつながる 子どもの安心感につながる 子どもへの丁寧な対応につながる 福祉職が子どもに関わる時間の充実につながる
お互いに専門性をいかして仕事ができるようになる	専門性をいかした役割分担ができる 医療機関との専門的なやり取りにつながる お互いに安心感が得られる
看護師の専門的知識をふまえて福祉職が子どもに対応できるようになる	専門的な助言をもらうことができるようになる 専門的なことを相談することができるようになる 看護師のもつ医療に関する知識や情報を獲得できるようになる 子どもとの関わりに対する意識の向上につながる
日常生活をふまえた看護師の対応につながる	

謝辞 本調査は、NPO 法人 福島県の児童養護施設の子供の健康を考える会共同代表の澤田和美先生、丸 光恵先生とともに実施いたしました。調査の企画においては、児童養護施設青葉学園園長の神戸信行先生ならびに児童養護施設福島愛育園園長の齋藤久夫先生にご助言とご指導を賜りました。また調査実施に際しては、全国児童養護施設協議会前会長の加賀美尤祥先生にご支援いただきました。先生方には衷心よりお礼申し上げます。そして調査にご協力いただきました全国の児童養護施設の皆様に厚くお礼を申し上げます。

出典 本稿は、2014年8月30日に宮城大学で開催された、第17回北日本看護学会学術集会で口演発表した抄録を電子化したものである。